

13. 心疾患における ANP 値の検討

中駄 邦博 塚本江利子 加藤千恵次
永尾 一彦 伊藤 和夫 古館 正従

(北大・核)

各種心疾患37例(虚血性心疾患20例・弁膜症11例・その他6例)の血中心房性利尿ペプチド(atrial natriuretic peptide; ANP)をRIAキット(HANPキット‘栄研’)で測定し左心機能との関連を検討した。心疾患群全体では健常群に比べて高値を示した。また、左室駆出分画(LVEF)や心係数(CI)との相関性はあまり強くなかったが、LVEFが40%未満やCIが3.0 l/min/m²未満の群では、そうでない群に比較してANP値は有意に高値を示した(p<0.01)。ANP値の測定により間接的な心機能の把握が可能であり、また血中ANP値は心不全の予期的な指標ともなりうる事が示唆された。

14. ¹³¹I 標識 CA 19-9 および CEA モノクローナル抗体カクテル(IMACIS-1)による腫瘍シンチグラフィ

永尾 一彦 加藤千恵次 中駄 邦博
塚本江利子 伊藤 和夫 古館 正従

(北大・核)

対象は大腸癌術後4例、乳癌術後1例、腹腔内腫瘍1例の6例で、肺、肝など合計11部位に転移巣をもち、血中CA 19-9またはCEAの少なくとも一方が正常上限値の2倍以上の高値を示す。投与量は3 mCi 4例、1.5 mCi 2例である。結果は11部位中5部位(45%)に陽性集積を認めた。陽性像は抗体投与後72ないし96時間のスポット像で最も判定が容易であった。1.5 mCi投与2例のうち1例は陽性集積を認めた。直径2 cm以下の転移巣で陽性像を得たものはなかった。血中クリアランスは2相性を示し、第1相の半減期は12.9時間で第2相のそれは50.5時間であった。本薬剤によると思われる重篤な副作用は一例も認められなかった。

15. 興味ある肝・ガリウム・シンチグラムを示した悪性リンパ腫の1例

原田 聡 加藤 邦彦 高橋 邦尚
高橋 恒男 柳沢 融 (岩手医大・放)
中館 一郎 (同・一内)

放射線療法、化学療法の進歩により、悪性リンパ腫の長期生存例が増加しており、それに伴う種々の興味ある病態について報告されるようになってきた。

われわれは、1985年より、悪性リンパ腫(non-Hodgkin lymphoma, medium sized-cell)の長期生存例で、^{99m}Tc-phytate, ⁶⁷Ga-citrate シンチグラムにて、著明な肝脾腫とともに、肝内に multiple defect が認められ、CTでもシンチグラムと同様の所見をみた症例を経験したので報告した。

その経過は、1985年6月より、'88年6月までに、CHOP, VEPA を4クール施行したため、一時肝脾腫はほとんど消退したが、その後、'89年3月までにCHOP 6クールを施行したにもかかわらず、再び肝脾腫大を示した例であり、現在も経過観察中である。

16. 腹部のびまん性⁶⁷Ga集積像を呈した3症例

伊藤 和夫 古館 正従 (北大・核)
早坂 隆 桑原 慎一 佐々木春木
斉藤 弘 (函館中央病院・内)

腹部に⁶⁷Gaのびまん性集積像を呈した3症例について報告した。

1例目は20歳、男性で、約1か月持続する微熱と、入院時にはイレウス症状が観察された。治療に抵抗する発熱が持続し、開腹後の組織診で結核性腹膜炎と確定された。2例目は61歳、男性。少量の腹水と腸管を巻き込む一塊状の腫瘍病変がCTスキャンで検出された。⁶⁷Gaスキャンでは腹部全体および右下胸部にも集積が示された。腹水穿刺の結果、悪性リンパ腫と確定された。3例目は45歳、女性で、腹部CTでは腹水よりも高吸収の液体貯留が観察され、腹水穿刺では膿汁様の液体が吸引された。化膿性腹膜炎が疑われたが、腹水から悪性リンパ腫の腹腔内 lymphomatosis と診断された。

⁶⁷Gaスキャンで腹部のびまん性集積像を観察する機会は稀である。もし、このような所見を観察したら腹膜炎あるいは悪性リンパ腫の腹腔内播種を疑うべきであろう。